

生涯学習時代の交流

— 彼等の学んだ日本文化 —

廣 瀬 鎮

今年もアラスカ州立大学フェアバンクス校からダルシー・M. ライアンさんとキース・A. カリー君の二人がNGUへ長期受入れの交換留学生としてやってきた。2月早々から、外国語としての日本語の勉強に取り組んでいる。

去年は同じく同大学からナンシーさんとジム君が勉学にやってきて4月からは、共に日本文化を学ぶこととなった。この年は、私にとっても初めての英語による講義であったので、実に多くのことを学ぶことが出来た。教えることはまことに学ぶこととなるかな、である。

日本人の現代生活の中から、日本の過去を知ってもらおうということで、現代の人類学研究の立場から、身のまわりの生活文化を具体的に取り上げ、日本文化の歴史に迫ったのであるが、共に大変な興味を示してくれ、毎回の授業では生き生きとした討論がはずんで、なかなか水準の高い日本文化の学習が出来たと信じている。

これは、私の持論であるが、あらゆる授業のよりよい、そして有機的な理解のためには、実物、文献、映像、情報資料で、満ち満ちているすぐれた文化装置を十二分に活用すべきだと考えている。この度も、両君を名古屋市博物館に連れて行き、現場の学芸員さんから、博物館利用学を含めて、丹念に展示物の解説を受けながら見学してまわった。シーボルト展が丁度開かれていたが、二人は江戸時代の日本文化を海外に紹介したシーボルトの貪欲なまでの学問的好奇心に強烈なショックを受けたようである。留

学中、“今の日本は、アメリカと何ら変わることがない。しかし日本人の価値感はずいぶん違う。”と気付いたのはジム君である。一方、ナンシーさんは、日本風とされる様々な習慣にすっかり持前の好奇心をぶつけ、日本の生活文化を身につけていった。この二人の学生にとって博物館での勉強は、相当にインパクトの強いものであり、“シーボルトが、なぜ日本のとりこになったかがわかる。”という。彼等も帰国後はNGU（名古屋学院大学）での体験、瀬戸の街での暮らしと人々の心を大切な文化として、また記憶として、アメリカの社会の中で、紹介してくれることであろう。

交流は、口や文字で表現される世界とおよそ異なっていて、一人一人の心の動きと深く係わっている。急速に発展する日本の社会の中で、留学生の持つ新鮮な好奇心を大学や博物館を通じて豊かに育てる、体験学の世界をもっともっと広げて行きたいものである。愛知県には60余を越える博物館が設置されていることを付言しておこう。

- 岐阜県博物館協会顧問
- 名古屋学院大学教授
- 国際交流センター長

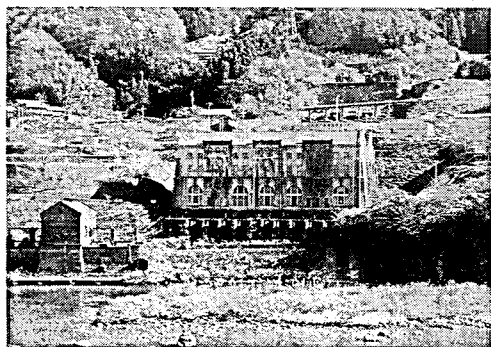
この稿は許可を得、名古屋学院大学国際交流センター機関誌より転載させていただきました。

八百津町歴史民俗資料館

(八百津町郷土館)

〒505-03 加茂郡八百津町八百津諸田

TEL 0574-43-3687



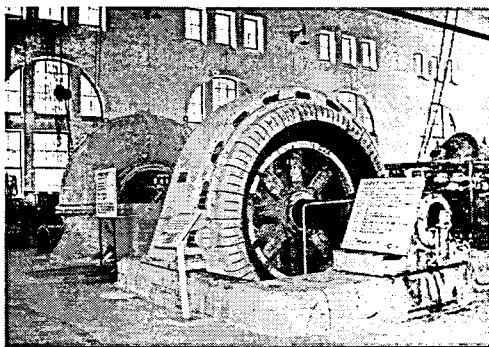
八百津町の市街地を抜け、なお木曾川上流にむかっていくと、やがて新丸山発電所の巨大な配水管が目にとまる。そのすぐ下流に八百津町郷土館がある。同館は、木曾川水系最初の発電所として明治44年に建設された旧八百津発電所をそのまま利用したものである。旧八百津発電所は、開業当初出力7500kwで当時としては最高水準のものであった。昭和49年11月に新丸山発電所が完成し、63年間にわたる発電の歴史を閉じた。昭和53年に関西電力より町に譲渡され、町文化施設として保存されるに至った。開館は昭和63年7月26日で、この間自治会を通じて、町内に残る民俗・文献・考古各分野の資料の収集に努め、現在の収蔵点数2万を超える。鉄骨赤レンガ造りの建物は、近代初期建築の特徴が随所にみられ建築史的にも貴重な遺跡といえる。郷土館本棟と放水口発電機は岐阜県重要文化財に指定されている。

展示室は大きく三つに分かれており、発電所時代そのままの空間利用が図られている。1階展示室は、もと変電室であったところで、今も天井には高圧線がめぐらされ、展示物のかけから変圧器が顔を覗かせている。展示品には、八百津町の主要な産業であった水運関連資料、林

業資料や農具などのほか、家庭用具・日常用具が陳列されている。いずれも自由に触れることができ、来館者がその生活感覚を追体験できるようになっている。特に、ダムが建設されるまで、盛んであった水運関連の資料は、当時のいかだ師の仕事ぶり、生活ぶりを彷彿とさせるものばかりである。木曾川流域文化、水の文化を考える時に、なくてはならない資料といえよう。

2階展示室には、考古資料、民俗芸能資料や古文書、明治～昭和期の教科書、衣服装具などが陳列してある。八百津町の木曾川流域には、縄文時代の遺跡が数多く知られている。同館には、立壁遺跡、南森遺跡、榎の木遺跡などの発掘資料のほか町内各地の表採資料が納められており、その数は1万点を超える。縄文中期土器や打製石斧の多さには目を見張るものがあり、系統だった整理・展示が望まれる。また、かつて町内に住み、いくつかの遺跡の調査にも参加された実験考古学者武馬正敏氏の復元縄文土器の数々も展示されており、彩りをそえている。民俗芸能資料としては、県の重要無形文化財に指定されている久田見祭りや八百津祭りの祭典用具をみることができる。

展示の最後は発電機室である。発電機(GE社製)3台、水車(モルガレスミス社製)3台が設置されている。これらは大正12年からのもので特に水車は横軸フランシス型でつくば博覧会に出品展示されたものである。ダムが作られる以前は、上流から用水を引き、貯水場に貯めた水を落として、水車を回した。普段水力発電機をみる機会に恵まれないだけに、訪れた人は、そ



〈発電機室〉

の大きさと構造に圧倒される。

八百津町の歴史を考えると、木曾川は欠くべからざる存在である。人が住み始めた原始の時代から現代に至るまで、有形・無形にその恩恵を受け、利用してきた。そういった、人々のつつまじやかな生活、自然に対する挑戦の足跡をかえりみることができる、八百津町郷土館である。

- ・開館時間 9:00～16:00
- ・休館日 毎週月・火曜日、第3日曜日
- ・入場料 大人100円・小中高校生30円
(岐阜市歴史博物館 横田宏)

飛驒の匠文化館

〒509-42 吉城郡古川町壺之町10-1
TEL 05777-3-3321



飛驒古川は天正13年(1585)金森長近が飛驒一円を統一したあと、その嗣子可重が平城を築いて以来城下町として発展しました。町中には飛驒の匠の技を今に伝えるたずまいが並んでいます。昭和61年度には歴史的町並みを生かした町づくりの調査が日本ナショナルトラストによって実施されました。

古川らしい個性あふれる町づくりに指針が示され、ここに「飛驒の匠文化館」が設立されました。

〔概要〕

「飛驒の匠文化館」は、財団法人観光資源保護財団が、創立20周年記念事業として日本宝くじ協力の助成のもとに飛驒の匠発祥の地に、木の国飛驒で育った木材を使用して地元の大工

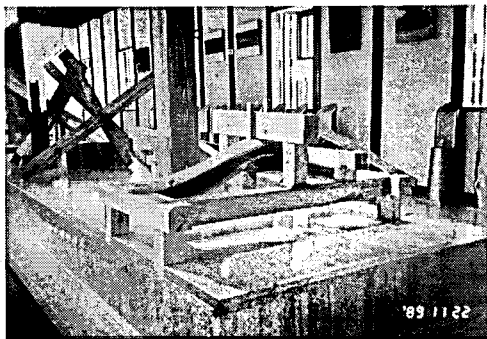
さん達により飛驒の匠の技を結集して平成元年10月完成されました。

外観は古川の顔である瀬戸川べりの白壁土蔵街に合わせたよらい壁の蔵造り風、屋根には灯籠の延長上の終点として大あんどんがシンボルとなっています。軒下には各大工さん固有の、「雲」と呼ばれる腕木のささえである肘木の紋様を取り付けてあります。また飛驒の匠の技や術は継ぎ手や木組などに木の持ち味を生かした伝統の妙技が織り込まれています。展示は「匠の業績と足跡」「匠の道具」「匠の技と術」「体験と遊び」などで町並や民家、商家の紹介、大工道具や木材資料展示、又各種の継ぎ手や木組による妙技が解るようにした作品と共に、実演や体験の場や「雲」を幾つも取り付けたモニュメント「飛驒の匠千手観音」の設置などで、木造建築の歴史と文化の一翼をになってきた飛驒の匠の業績と技術を中心に展示紹介しています。二階和室「大いちょうの間」は、来館者の休憩の場と共に地域住民の集会や建築関係者の拠点の場として使用します。

- ・開館時間
4月1日～10月31日 9時～17時
11月1日～3月31日 9時～16時30分
- ・休館日
月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月29日～1月4日)
- ・入館料

	個人	団体(30名以上)
大人	200円	160円
小中生	100円	80円

(日下部民芸館 三島藤男)



第37回 全国博物館大会報告

生涯学習と博物館Ⅱ

伊藤 秀幸

平成元年11月9日・10日、名古屋市の電気文化会館・でんきの科学館を主会場として、第37回全国博物館大会が開催された。参加者は300名を超え盛大であった。

本年は大会テーマ「生涯学習と博物館Ⅱ」—その発展のための現状と問題点—のもとに、初日は開会式、表彰式、分科会を、2日目はパネルディスカッション、博物館視察、全体会議を行った。恒例の記念講演会が、討議をより充実させるためとはいえ、割愛されたのは多少残念であった。

開会式では、急逝された徳川宗敬会長の後任として就任された津軽義孝新会長のあいさつがあり、棚橋賞等の表彰式の後、文部省生涯学習局社会教育課長沖吉和祐氏の講演があった。中央教育審議会の生涯学習に関する小委員会は、博物館を生涯学習の基盤整備の一環に盛り込む方向で検討中とのことであり、氏は基調講演の中で次のように述べられた。

- 生涯学習体系の中で、学校が最も変化を要求される。学校は地域の学習センターとして、その施設・機能が十分活用されるよう何時でも解放されていることが望まれる。
- 学校教育が道徳(しつけ)まで引き受けて肥大化し、社会教育は空洞化し取り残されている。社会教育法第3条にいう—すべての国民があらゆる機会と場所を利用して、文化的教養を高め得るような環境を醸成するように努めなければならない—任務を再確認する必要がある。
- 博物館は生涯学習との関連の中で、地域に開かれた、楽しく学べる、独自の特色をもつ学習センターとしての機能が期待されている。
 - ・学習のノウハウを提供する—何かあったら博物館へ。
 - ・役立つことが身につけられる—体験できる場所。
 - ・ニューメディアの導入—展示等の個性化
 - ・展示しない活動の重視—展示を支える(プ

ラスα)付帯事業を他者との共同で。例えば博物館でコンサートを。

- ・資料・情報のネットワーク化—学習者のニーズの多様化に應ずる広域的システム化、他館との共同購入、共同収蔵庫、共同企画の検討。
- ・職員体制の充実—専門性を高め、基礎的資質の向上。学校と博物館の間のトレード。在野のボランティアの活用。
- ・運営基盤の整備・充実—特に、民間資金の導入(寄付についての税制の問題を検討中とのこと)。

大会は引き続き人文系・自然系をそれぞれ公立・私立等の5つの分科会に分かれて討議され、名古屋市科学館での第3分科会(公立自然系)に講師の一人として参加した。その意見などの主なものは次のようである。

- 自然科学の生涯学習のカリキュラムを作り、人間自身が自己を客観的存在としてとらえ、生命を厳粛にとらえることができるようにしなければならない。
- 自然の切れ端の学習のみで事足りるとせず、全体の自然がみえるようにするための新しい方法を研究しなければならない。
- 生命は大切であるが、残虐さのみをとりあげると昆虫採集やバードウォッチングを禁止している国のようにになってしまう。自然をどうみるかを職員を含め皆さんでよく話し合うことが大切である。
- 21世紀を生きのびるには科学抜きでは考えられない。子供の頃からサイエンス好きを作らなければならない。

その他、時間を大巾に超過するほど白熱した意見交換があった。特に、公立といってもその規模の大小や歴史によって論点が食い違い、博物館のあり方の難かしさを痛感した。パネルディスカッション、大会決議は公務のため欠席した。

(岐阜県博物館長)

第15回 会員研修会報告

「展示の方法」について

第15回研修会は、下記要領で実施しました。

〈研修内容〉

研修テーマ：「展示の方法について」

(特に手作り展示を例に)

研修日程

・ 13:00～14:00

講演 「展示の方法について」

講師 堀部武男氏(セイメイ社代表取締役)

・ 14:10～15:00

解説 「手作りの模型」

尾関 章学芸主事(岐阜県博物館)

・ 15:10～16:00

展示場案内 特別展「硯」を例に

川瀬善忠学芸主事(岐阜県博物館)

今回の研修は、会員の技術を高めるための研修会として実施しました。当日は雨天であったにもかかわらず、23名の参加者を得て充実した運営ができました。

〈講演内容〉

講師堀部武男氏からは、展示のテクニックについて次のような話がされました。

三点展示；一般的に展示物は雑然と展示されている場合が多いので、バランスを考え、三点ずつまとめて展示するとよい。

展示の構成；横書きのパネルが多いことから動線は右回りにするとよい。また、展示は単調にならないように心掛け、途中で一息つけるような展示構成や休息できる空間な

どを設けるとよい。

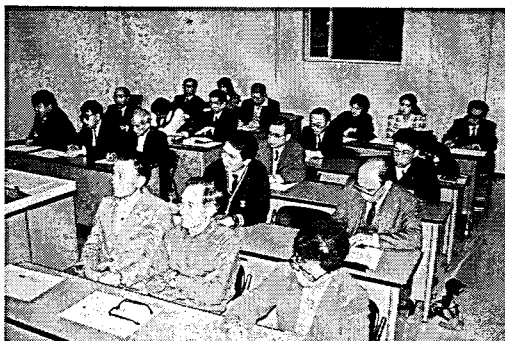
展示物は積み重ねることなく、壁面につるすなどし、空間を有効に使用するとよい。照明；資料によって、自然光を用いたり、遮蔽したり、ピンスポットをセットすることなどをし、価値観を高めるとよい。

写真パネル；同じ大きさの写真を羅列することなく、サイズを変えたり、また、手法を写真で説明するなどの工夫をするとよい。

解説パネルやキャプション；字は横書きが良く、行間は字と1対1くらいにあけると読みやすい。また、一つの解説板ですべてを訴えようとせず、コーナー、展示物の概要、専門家用など解説を三段階くらいに分けて書き、来館者が見学時間や関心度によってパネルを選択して読めるようにするとよい。字は原色を使うことが多いが、グレイや群青を使ったり、色を混ぜたものを用いるのもよい。

展示台；傾斜台、^{ひな}雛壇、サイコロなどが用いられるが、どれを用いるかは、展示ケースの腰板の高さで選択するとよい。

以上のことなどを、種々の展示例を話題にしながら話されたあと、展示を良くするのは、担当者の個性を生かすこと、気持ちよく見ていただくという心が大切であることなどを話され、まとめられました。



第14回 東海三県博物館協会交流研修会報告

開かれた博物館・受身でない博物館

平成元年度東海三県博物館協会交流研修会が、11月29日(木)・30日(木)の両日にわたって、三重県伊勢市で行われた。



(岐阜県代表で発表する三宅重夫氏)

1. 研修会

参加者80余名が集う中、今回のテーマ「開かれた博物館・受身でない博物館」について研修を深め、充実した時を過ごすことができた。

第1日の研究会では、武豊町歴史民俗資料館奥川弘成氏の「当館における教育普及活動について」、日本大正村 三宅重夫氏の「ボランティア活動について」、海の博物館 石原義剛氏の「スミソニアン博物館群を見て」の各県代表者による実践報告と意見交換がなされた。

その後、三重県博物館協会会長・中村幸昭鳥羽水族館々長より「二十一世紀の博物館」と題した貴重な講話を伺うことができた。ユーモアあふれる話しぶり、熱心な語り口からは、中村氏の博物館人としての豊かな見識がうかがわれて、大変興味深いものであった。

第2日の研修も快晴に恵まれ、三重県斎宮歴史博物館と伊勢神宮山田工作場の見学、そして伊勢神宮の特別参拝を行った。

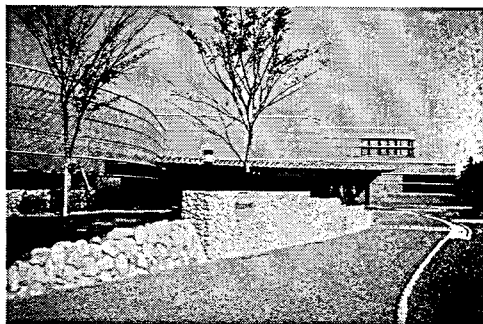
斎宮歴史博物館は、10年程前から発掘された斎宮遺跡に建てられ、平成元年10月に開館したばかりの博物館である。展示室は、発掘調査と文献研究に基づいて、斎宮とその背景となったこの地域の歴史風土が多角的に紹介されており、特色ある博物館として、歴史ある伊勢市にふさ

わしいものとなっている。

山田工作場では、広大な敷地の中で^{ひのき}桧材が柱や板に削られたり、彫られたりしているところを見学した。これは平成5年に迫った式年遷宮に備え行われているもので、神宮徴古館々長岩田貞雄氏の案内で見せていただいた。

珍しい資料など拝見し、また貴重な講話を伺って、博物館人として今後の進む方向を見通すことができ、新たな責任と意欲をかきたてられた有意義な2日間であった。

以下、中村氏の講話を要約紹介して、研修報告としたい。



(斎宮歴史博物館の全景)

2. 講演 「二十一世紀の博物館」

(1) ミズスマシの文明論

激動する世界状況の中で、今こそ大胆な発想の転換が必要になっている。我々博物館人としてもそれを自覚しなければならない。

ミズスマシは、ちょっと見には水の上を軽やかに泳いでいるが、スローモーションビデオで



(斎宮歴史博物館の映像展示室)

見ると6本の足を目まぐるしく動かしているの
である。ボートのオールのように動かしており、
それを止めれば沈没する。動かしているから前
進できる。つまり我々の博物館、企業、そして
人生においても同様で一生懸命努力していると
ころは、前進し繁栄する。

ミズスマシは目が三つある。前を見ている目
と、下からの敵を警戒する目、そして空を見る
目。すなわち上下と前を同時に見極めているの
である。我々の人生でいえば、過去への感謝、
現在はどうなっているかという正しい現状認識、
それに未来の展望を確かなものに通することに
通じている。過去、現在、未来の三方向を同時
に見極めているミズスマシはすばらしい。

(2) 生涯学習での位置づけ

そこでまず二十一世紀に向けて、今強く叫ば
れている生涯学習では、何が大事であるかを考
えなくてはならない。幼児教育、学校教育、社
会教育といろいろあるであろう。けれども博物
館がどのように位置づけられるかが、その中
でも重要な課題である。我々博物館関係者は、
生涯学習の中に博物館を取り入れ、位置づけて
いこうとする努力が必要であり、このことこそ
が私たちの重大な責務だと考える。

(3) 五官をゆさぶり感動を

博物館は、感動させることを大切にしたい。
五官(感)の本能を大切にしたい。まず目。山
に生活している人は、海に行ってみたい。農村
の人は都会に出てみたい。今まで見たことな
い非日常的なものを見たい。そこから旅が始
まる。次は口一味覚、昔の人たちは、「夏のス
ズキは絵に描いても食べよ。」と旬のものを好んで



(式年遷宮に備え屋根などに使うカヤの準備)



(ユーモアをまじえ熱っぽく講演する中村幸昭氏)
食べた。聴覚、臭覚、触覚も同じこと。周知の
ように最近では、目で見て楽しい展示だけでなく
触れる展示が取り入れられてきている。この五
官の本能を満足させるものが観光とか旅の原点
とするならば、博物館もそうありたいものであ
る。

(4) PRはコマーシャルでなくニュースで

博物館は公私立を問わず、文化・教養を国民
のためにアピールする施設だから公共性があり、
話題性がなければならない。そしてナウな感覚
が必要である。昨日こんなことがあったと発表
するのではなく、今日このようなことがあったと
いうトゥデイニュースでなくてはならない。さ
らに一步進めて、トゥモローニュースとニュー
スのアフターケアが必要だ。すなわち明日は何
が起るといった予告とか、この事実からこんな
ことが分かった。その後こんな処理がしてある
といったものである。これらは、チラシ、コマ
ーシャルのようにお金を使う宣伝ではなく、ニ
ュース記事やニュース番組として報道したい。

(5) 中身で勝負

博物館は読んで字のごとく、博く物を見る館
と書く。博物館人は自分の専門分野だけでなく、
専門外のレパトリーをいかに広げるかという
幅広い学問が必要だ。知的好奇心を持ち続け本
を読み、論文を読み、人の話を聞くなど、あらゆる
ものから知識を吸収すると同時に、高度情報
化時代の中で何が必要で、何が不必要なのかを
分析・選択する能力を養いたい。博物館は外観
や建物の大きさではない。すなわち中身で勝負、
これが二十一世紀の生き残りに向けた基本理念
である。

第42回 公開講座報告

中山道

とき H1. 11. 20

ところ 御嵩町中公民館

講師 岐阜大学教養部教授松田之利先生

本年度第3回目の公開講座を、中・北濃地区の担当で、御嵩町教育委員会との共催のもとに開催した。

あいにく、前日から冬型の気圧配置となり、飛騨・奥美濃方面では積雪を記録するなどから当日の天候を心配したが、思ったほどのこともなくまずまずの日和となったことや、御嵩町では現在町史編纂事業が進められていることもあって、町民の郷土への関心も強く、43名の参加者を得て充実した講座となった。

◇ 松田先生の講演要旨

近年、村おこし、町おこし運動が盛んであるが、歴史的遺産を核として活性化を図っていくには、住民の十分な理解とコンセンサスを得ておく必要がある。一時的なブームに乗っても、観光的には1年しかもたない。

中山道については、道の通る地域の人々にとってどうであったのかを考えたとき、不明なことが多い。中山道は江戸時代公的道路であったため、民間の物資の輸送に際しては各宿場経由となり、費用・日数とも私道より多くかかった。私道であった中馬街道では、岩村のように私設運送業が発達し、商品流通の面から大いに役立っていた。中山道は、地域の産業発展にはあまり役立っていなかったのではないか。

中山道の公的道路としての位置づけは、中世からの歴史的な重みがあったことと関係がある。



願興寺

当町にある願興寺は、東山道のルートとして、武田信玄が岩村城とともに美濃を攻略する軍事的拠点として重要であったこと。また、江戸時代盲目の女性を統括する寺であったことから、早くから寺院を中心にその門前町として発達してきた。

愚溪寺については、元は愚溪庵と称し、僧侶が風雅な生活をしたところであった。近在の有力者らが土地を寄進し大きくなったものである。この寺も、当初の建物があった場所は一定の防備を持った軍事的砦としての役割を果たしていたと考えられる。

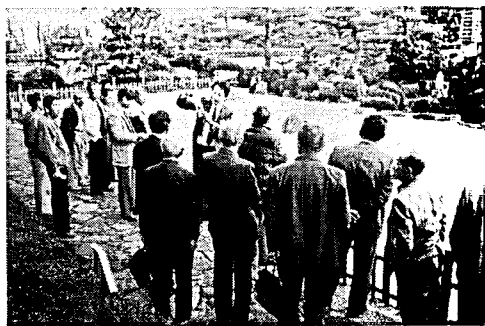
文化の発展という視点からみると、鶴沼に万里集九という僧が住み、「梅花無尽蔵」なる庵を営み、多数の文人が集まって「鶴沼の友社」という結社を設けていた。また、岐阜の川手には、正法寺のもとに「川手の友社」があった。

当地には、愚溪庵の他に在平行平、和泉式部の碑が存在し、中世以来文化的な意味での歴史の重みがあった。瑞浪の細久手には開元院があるが、この寺は東濃地方の禅宗曹洞宗の中心寺院であった。

東濃方面には農村歌舞伎が発達したが、こうした文化は、街道筋を経て江戸・大坂から入ってきたものと考えられる。中山道ぞい、文化的な面でまだまだ未発掘の資料が埋もれていると考えられ、研究の余地が多い。

◇ 見学地 — 願興寺・愚溪寺 —

講演終了後、両寺を見学したが、講演内容と合わせて極めて意義深いものとなった。



愚溪寺